

光村図書ウェブサイトのご案内

光村図書のウェブサイトが、全面リニューアルしました。デザインを一新し、すっきりとした見やすい画面に。また、お探しの資料にアクセスしやすいよう、情報を整理しました。

そして「みつむら web magazine」という、楽しい読み物を集めたコンテンツを新設。連載『『自画像』のひみつ』では、美術ジャーナリストの藤原えりみさんが自画像をめぐるさまざまなエピソードとその見方を紹介します。その他、作家の森絵都さん、翻訳家の金原瑞人さんなど、豪華な執筆陣による読みごたえのある連載がたくさん。奥村高明先生（聖徳大学教授）の新刊書籍『エグゼクティブは美術館に集う』の紹介記事も掲載しています。その他に、くるくる回る風車といっしょに光村図書の歴史をたどる「みつむら history」などの新コンテンツも。

また、光村コミュニティ（会員専用）にご登録いただくと、「美術準備室」のバックナンバーをすべて閲覧することができます。

新しくなった光村図書ウェブサイト、ぜひご覧ください。



光村図書ウェブサイト
www.mitsumura-tosho.co.jp
新コンテンツも加わり、さらにパワーアップしました。

『エグゼクティブは美術館に集う』
「脳力」を覚醒する美術鑑賞
奥村高明著 光村図書出版
本体1,950円＋税
サイトリニューアルと同時期に発行。
美術鑑賞の重要性を問う新刊書籍です。



美術準備室 No.7

2015（平成27）年4月15日

発行人 ■ 常田 寛
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話：03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days (大久保裕文+小倉亜希子)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



特集

うつくしい!を
さがしにいこう
平成28年度版『美術』のご紹介

アトリエ訪問

画家 井上直久

作家の肖像

染色家 柚木沙弥郎

放課後ART

●宮城県名取市立
第一中学校
●BEPPU PROJECT

この1点

「阿修羅像」
みうらじゅん

アトリエ 訪問

第 7 回

井上直久

画家

空中に浮かぶ島、海の上を走る列車……
不思議でありながら美しく調和がとれた世界を描く、井上直久。
大阪府茨木市にあるアトリエで、
今日も想像を膨らませ、筆を走らせている。

撮影 伊東俊介





「僕にとって、
絵を描くことは、
心の声に耳をすませること。」

「ジャングルみたいな外観だから、すぐわかりますよ」。電話でアトリエの場所を尋ねると、井上さんは笑いながらそう教えてくれた。確かに、ツタに覆われた一軒家は、車道からもひと目でわかるほど、不思議な存在感を放っていた。我々が車を停めると、ひょろりとした長身の井上さんが、アトリエから姿を現した。

—— 緑に覆われた、すてきな自宅ですね。

井上 ツタを適当に植えたらどんどん伸びてしまって（笑）。ほとんどが常緑ですが、アトリエの窓際は落葉性のツタにしました。そうすると、冬は葉がないから、日当たりがよくて暖かい。夏は葉が茂って日よけになるから涼しいんです。



ツタが美しい玄関。入って左側がアトリエで、右側が自宅。かわいらしい看板が客人を迎える。



白色は、アクリルやジェッソなど、濃度や粘度の違う数種類の絵の具を混ぜてつくる。



幻想的な「イバラード」の世界。アトリエには、これまでの作品が所狭しと並べられている。

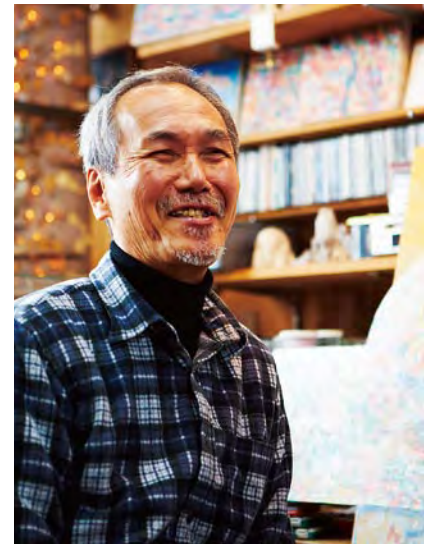
アトリエをつくるときにこだわったのが、この東向きの窓。一枚の大きなガラスをはめてもらいました。東向きだと、午前中はたくさん光が差すけど、午後は光の差し方がほぼ一定になる。僕が絵を描くときのリズムと合っていて、いいんです。——ご自宅を改築して、アトリエをつくられたそうですね。

井上 僕は、ずっと高校教師をしていたんですが、画家になりたいという思いが募り、43歳のときに教師を辞めてアトリエをつくりました。家内には心配をかけましたが……。

その後、友人が出版社を紹介してくれたことがきっかけとなり、東京で個展を開けるにまでなりました。そしてあるとき、^{みやぎはやお}宮崎 駿監督が個展に来てくださったんです。ちょうど、映画「耳をすませば」の制作中だったらしく、後日、スタジオジブリから「主人公の少女が空想するシーンを描いてもらえないか」と依頼されました。うれしかったですね。映画では、僕が長年描いている「イバラード」の世界を表現しました。——「イバラード」とは、どのような世界なのでしょう。

井上 僕の心の中にある空想の世界です。宮沢賢治が岩手県を「イーハトーブ」と呼んだように、あるとき、自分の住んでいる大阪府茨木市を「イバラード」と呼んでみたんです。そうしたら不思議と、自分の周りの世界が今までとまったく違って見えて、想像がどんどん膨らんでいきました。以来、自分が空想する世界を「イバラード」と名付け、作品を描き続けています。

——新版教科書『美術2・3』の「空想の世界を旅する」では、井上さんの制作過程をご紹介します。作品を制作するとき、まずキャンヴァ



いのうえ・なおひさ

1948年大阪府生まれ。

金沢市立美術工芸大学卒業後、
広告代理店のデザイナーを経て、高校教師に。
83年『イバラードの旅』で講談社絵本新人賞を受賞。

92年から作家活動に専念。

95年に映画「耳をすませば」の制作に参加する。
「イバラード」という空想世界を30年以上にわたり
描き続け、全国各地で個展を行っている。

スに、いろいろな色の絵の具をまき散らすそうですね。

井上 僕の場合、真っ白なキャンヴァスに描きかけを見つけるのは難しいんですが、さまざまな色が混ざったキャンヴァスを眺めていると、建物や人の像が見えてきて、イメージやストーリーが次々と浮かんでくるんです。その見えたままに筆を進めていくと、作品ができあがる。だから、どんな絵になるか自分でも最後までわからないんです。自分の心の奥にある世界が引き出されるようで、描くのがすごく楽しいですよ。

映画「耳をすませば」の英語のタイトルは「Whisper of the Heart(心の声)」というらしいのですが、最初にそれを知ったとき、あっ！と思いましたね。だって、僕にとって絵を描く行為は、まさに「心の声に耳をすませる」ことなので。

だから、あの映画との出会いは偶然じゃないな……なんて、今になって思うんです。

うつくしい！をさがしにこう 平成28年度版『美術』のご紹介



新著者
対
談

永関和雄
元全国造形教育連盟委員長

近藤誠一
元文化庁長官

文化に出会い、心を育む美術

光村図書中学校『美術』教科書に新しく関わっていただいた先生方に、
文化に出会い、心を育む美術科の重要性を語っていただきました。

撮影 鈴木俊介



こんどう・せいいち

神奈川県生まれ。近藤文化・外交研究所代表。東京大学教養学部を卒業後、外務省に入省。文化交流部長を経て、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、駐デンマーク特命全権大使、文化庁長官を歴任。石見銀山（島根県）、平泉（岩手県）、富士山（静岡県、山梨県）の世界文化遺産登録に携わる。『文化外交の最前線にて』（2008年、かまぐら春秋社）、『外交官のア・ラ・カルト』（2011年、かまぐら春秋社）など、著書多数。平成28年度版光村図書中学校『美術』教科書著作者。

世界でも特徴的 自然と寄り添う日本の文化

永関 文化というと、富士山に続いて群馬県の富岡製糸場、和食や和紙が世界文化遺産に登録される運びとなり、日本人としては誇らしい思いです。

近藤 そうですね。日本の文化が世界的に認められている一つの表れだと思います。世界の中でも、日本の文化は非常に特徴的です。歴史上、他の地域にみられるような異民族による征服がなかったため、自らの自然環境や風土の中で、自分たちがこれだと思ふことを絶やさず、継続して発展させていきました。そこにアジアやヨーロッパなどの国々から新

しい文化が入ってきて、それをうまく消化しながら洗練させてきたという歴史があると思います。

永関 自然環境や風土となると、日本の場合は比較的穏やかですね。暑さや寒さ、災害はもちろんありますが、それでも自然から自分の生活を隔離して守るというよりも、むしろ自然の中に溶け込んでいきたいというような部分が、昔からの生活の中にはあると思います。

近藤 まさにそこが日本の文化の特徴の一つだと思います。ヨーロッパの人たちは自然を人間が抑制し活用するものとして捉え、科学技術を進歩させました。しかし日本人は、昔から人間を自然の一部として捉えており、自然とともに、自然に寄り添うように生きてきたといえます。

永関 自然と一体になる、自然を楽しむ、ということは生活に根づいていますね。私たちが日常で使う物には、たいてい草花や動物などといった自然のものがモチーフとして描かれていたり形づくられていたりします。子どもたちにもわかりやすいので、私は、美術の授業などでそういう話をするようにしていました。

近藤 伝統工芸や伝統芸能は、自然のもつ力や奥深さに対する日本らしい見方をしっかり残しています。自然から学ぶべきことを私たちによく示してくれている。だからこそ、そうしたものは大切にしていかなければならないと思います。

永関 私は常に文化を意識している

というわけでもないのですが、それでも何かの機会にそうしたものに触れたときには、どこか懐かしい、自分の日本人としてのルーツを感じますね。それは近藤先生のおっしゃられるように、日本の文化がずっと古くから今まで連綿と続いていて、何か自分に通ずるところを感じているからなのかもしれません。

年中行事から感じる 身近な文化

近藤 私の場合、自然や文化への意識は、幼い頃から刷り込まれていったものです。中学校のときは鎌倉に住んでいて、学校に行く途中、坂を登ると富士山がよく見えて美しいなと感じていましたし、多くの年中行事もありました。豆まきやひな祭り、端午の節句などですね。



ながせき・かずお

東京都生まれ。元全国造形教育連盟委員長。多摩美術大学美術学部を卒業後、教職に就く。中学校美術科教諭を経て、美術担当指導主事や校長という立場から美術教育の発展に尽力し、2014年度まで全国造形教育連盟の委員長を務めた。教鞭を執るかたわらは、自身も創作活動に勤しみ、墨や水彩絵の具による絵画、版画などの作品を制作する。平成28年度版光村図書中学校『美術』教科書著作者。

永関 そうした行事からは、季節や自然の移ろいを感じられますね。また、立派な文化だとも思います。文化という言葉から高尚な印象を受けますが、生活に根ざし、暮らしの中で育んできた面も大いにあるのだと思います。

近藤 そうですね。家庭や学校、あるいは地域の中で、子どもにそうした日常的な文化や自然に触れさせることは大切です。教え込むというよりも体験させることで、より多くのものを子どもたちに伝えられます。



永関先生の活動

町 田市立町田第三中学校の校長を務めていた頃には、学校運営の中で美術や文化に関する取り組みを積極的に行った。写真は2014年の餅つきの様子。生徒たちが田植えや稲刈りをした餅米を使って、釜をつかって蒸す。地域の方々の手を借りて、お雑煮やあんこ餅、きなこ餅などがつくられた。生徒は地域の方々と一体となって楽しんだ。

「文化には、生活に根ざし、暮らしの中で育んできた面も大いにある。」

永関

と減ってしまったように感じています。私は二つの中学校で校長をしましたが、どちらの学校でも、季節の行事を体験するというのを学校の特色として取り組みました。餅つきをしたり、こいのぼりを立てたりしましたね。餅つきは有志の生徒が中心となって、地域の方に手伝っていただきながら、釜を使って餅米を蒸すところから行いました。

近藤 そしてつきたてを皆で食べるわけだ。いいですね。地域の方との交流という面でも、素敵な取り組みだと思います。

永関 七夕飾りも、地域の方から4メートルもあるような竹をいただいてつくっていました。珍しい例だと思いますが、こういうことを学校で意図的にやらないと、今の子どもたちは経験しないまま成長していつ

てしまいます。こうした取り組みはやるとなると大変ですが、保護者や地域の方からの評判がよいです。

近藤 そういう地域の方々を巻き込んでいくことは重要だと思います。どうしても受験でいい学校に入って就職して働いて……ということばかりを考える時代になってしまっているの、生徒たちの感性を培うような取り組みに理解者が増えていくといいですね。そのためには美術や文化というものに対して、普段関心を寄せていないような人々にも関わってもらうことが大切になっていきます。

生徒の感性に大人が学ぶ文化に親しむ美術の授業

永関 今のは学校全体の取り組みでしたが、美術の授業では、例えば和



平成28年度版光村図書中学校『美術I』教科書の紙面。和菓子をつくる授業の参考になるようにと、本物の伝統的な和菓子の写真を大きく掲載している。

菓子づくりの実践がありますね。和菓子は生徒にとって身近なところで、日本らしさや文化といったものを感じられます。自分で和菓子のデザインを考えて粘土でつくるという授業はよく見かけるのですが、ある中学校では地域の和菓子屋さんに協力してもらって、白あんと色鮮やかな食紅をわけていただき、それをを用いて授業をしていました。

近藤 実際に食べられる材料ということですか。

永関 はい。生徒たちもとても意欲的に取り組んでいました。本物の和菓子をつくっているわけですから気合いの入りようも変わってきます。

近藤 私も和菓子というのはよく日本の文化を表しているものだと思います。季節を感じさせるモチーフを、見た目に美しい形や色であらわして

いる。これをつくるには、どの季節に何が美しく見えるのかということを知っていなければなりません。その時々自然へのまなざしが必要になりますね。

永関 その通りです。生徒たちがデザインをしっかり考えるためには、すぐに制作に入るのではなく、モチーフに関する調査も必要になります。その本物の和菓子の授業でおもしろかったのが、和菓子を完成させたあゝる生徒が、「先生、これ、このまゝ色紙の上ののせるだけではもったいないから」と言って、自分で葉っぱを取りに行つて、和菓子の下に敷いたのです。

近藤 素敵なエピソードですね。また、生徒がそうした提案をできる環境も含めて、先生はいい授業をされていますね。

新著者対談
永関和雄 × 近藤誠一
文化に出会い、心を育む美術

永関 そういう工夫を自らしていく生徒もいるのです。本当に素晴らしい感性をもっていると気づかされることが多々あります。どれだけ美術や文化について学んだ大人でも、思いつかないような発想です。そしてそれを認めてあげることが私たちの役目ですね。



近藤先生の活動

2011 年1月7日～6月24日に日本経済新聞社で連載した「あすへの話題」をまとめた一冊。連載中に起きた東日本大震災を受け、被災地への持続的支援の必要性和文化芸術の力を活用した復興教育への支援を訴えており、その思いに共感した21名の作家が挿絵を提供している。



『ミネルヴァのふくろうと明日の日本』
近藤誠一著 2013年
かまくら春秋社

2013 年、文化庁長官として参加したユネスコ世界遺産委員会。厳しいとされていた三保松原を含めて、富士山の世界文化遺産登録を勝ち取った、その舞台裏をつづった一冊。世界遺産の意義や日本の文化の特徴、外交官の交渉術まで読み取れる最新刊。



『FUJISAN 世界遺産への道』
近藤誠一著 2014年
毎日新聞社



新著者対談
永関和雄 × 近藤誠一
文化に出会い、心を育む美術

「美術科は、知識としてあれこれ覚えるのではなく、文化を体験的に感じられる教科。」

近藤

教師に求められる役割は生徒の潜在的な能力を紡ぎ出すこと

近藤 他の教科でも可能ですが、特に美術科では感性が生かされる機会が多いでしょう。生徒たちが心の中にもっている潜在的な感性をいかに紡ぎ出してあげるかが先生方の役割だと思います。生徒たちの発想や考えを押さえつけて、何かを教え込むのではなく。

永関 おっしゃる通りで、例えば鑑賞の授業で美しいものを見たとして、まず大事なことは「わあ、きれいな」と感じるることなんです。私がよく生徒たちに言ってきたのは、そうした感動を言葉にすることです。どうしてこんなにきれいなんだろう、ここの色かな、形かな、とい

うようなことを考えて、言葉で表現させる。そして出てくる生徒たちの言葉を聞くと、その感性に驚かされることが多々あります。

近藤 やり方によっては作品の作家や時代背景を知識として教えることもあるでしょうが、あくまでも知識は手段であって、目的ではありません。より深く作品を見つめて感動を経験するには、知識が必要ないときもある。そこで先生方に求められるのは、いかに生徒自身の言葉を引き出してあげるかだと思います。



「感じたことを話し合おう」では、2ページにわたって一点の作品を大きく掲載し、対話による鑑賞の活動を促している。

永関 最近、学校で授業を見ていると、まず生徒に作品と出会わせる授業が増えていて、喜ばしいことだと思います。例えば光村の教科書の「特別展示室」では、きれいな印刷で作品がほんと大きく掲載されている。生徒たちも作品の細部までよく見つけることができ、鑑賞の授業に活用できますね。

近藤 授業では生徒それぞれの感動があるだろうから、それらを共有することで新たなものの見方に触れることもできますね。先生方は生徒た

ちの気づきを促すよう、ぼつりとしたつぶやきを聞き逃さず拾ってあげることが大切です。

美術科の先生方が果たす大事な役割

永関 『美術1』の「文様、飾りの小宇宙」(P30-33)という題材を見ていると、美術科の意義を感じます。世界各国の文様が並んでいる美しい紙面です。世界にはいろいろな人々がいてそれぞれに文化があって……ということ、説明だけでなく目で見て感じるができます。

近藤 そうですね。ここでは西洋や東洋ということ無しに、公平な目で文化を見つめることができます。どの文様も平等で、それぞれに特徴もあれば似ているところもある。人間が共通して持っている美意識を感じてくれることを願うし、文化について考える基本になると思います。

永関 自分の住む日本という国の文化に触れることも大切ですが、同じくらい、他の文化について理解することも必要ですね。美術の場合、それがすんなりと生徒たちに入っていく気がします。

近藤 知識としてあれこれ解説を覚



『美術1』の4ページ題材「文様、飾りの小宇宙」の最初の2ページ。日本の伝統文様や世界各国の文様が色鮮やかに並んでいる。

えるのではなく、文化を体験的に感じられる教科だからでしょうね。文化を理解し合い認め合うことは、これからの世界にあってより求められることです。

永関 美術科というのは、作品をつくる技術を学ぶ教科ではなく、文化や自然などに触れ、自分がどう感じ

るかということが原点にあって、それを自分で表現してみようという教科です。先生方には完成する作品ではなく、それをつくる過程にこそ意識を向けて授業を行ってもらいたいです。生徒たちの感受性に目を凝らしてほしいと思います。

近藤 いろいろな教科の中で、今の生徒たちに最も必要な感性や精神性、人や自然を敬う心につながる教科が美術科だと思います。そういう意味で、美術科の先生方は学校教育の中で最も大事な役割を果たしています。生徒の潜在的な感性や能力を引き出すような授業が、今後も増えていくことを願います。



平成28年度版 光村図書中学校『美術』教科書

近藤先生と永関先生に著作者として加わっていただいた新版教科書は、1年と2・3年の2冊構成になりました。1年で基礎基本をおさえ、2年3年で表現の幅を広げていける内容になっています。次のページからは、工夫を凝らした教科書紙面をご紹介します。



『美術1』表紙作品
三沢厚彦「Animal 2007-03」



『美術2・3』表紙作品
ルネ・マグリット「ピレネーの城」

登場,全国の仲間たち

光村の新しい教科書では,生徒たちの体験や生活に根ざした
題材設定を心がけるとともに,彼らが作品にかける思いや制作する姿,
試行錯誤を経て完成させる喜びに目を向け,等身大の中学生の姿を取り上げました。

作品を,作者である 生徒とともに

『美術2・3』P26~29
「自画像,今を生きるあなたへ」

自画像の題材では,制作した生徒が
自分の思い出の場所に立って,作品
を手にする姿を掲載しました。
同じ中学生の姿と作品を大きく取り
上げることで,生徒一人一人が仲間
意識をもって,自らも思いや内面と
向き合い,制作に取り組めるよう配
慮しました。



表現の過程を 丁寧に追った 「みんなの工夫」

「みんなの工夫」というコーナーを
新設しました。実際の授業で,生徒
が作品を発想してから完成させるま
での試行錯誤の様子を取材し,掲載
しています。



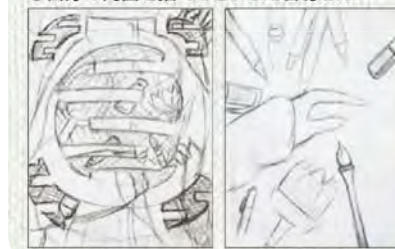
「4ページ題材」

「自画像,今を生きるあなたへ」は,
4ページ続きの題材になっています。
はじめの2ページは,自画像
をもつ同じ中学生の姿で学習意欲を
高めることを意図しており,続く2
ページは生徒自らが表現する際の参
考になる作家作品や「みんなの工夫」
などの内容で構成しています。
2ページで導入の内容を,続く2
ページで制作の手助けとなる内容を
示した「4ページ題材」は,自画像
の他『美術1』『美術2・3』合計で
5本掲載しています。

【みんなの工夫】今の自分を見つめ,あらわそう

あなたは何かが好きで,どんな性格で,どのように成長していくのだろう。
鏡に映る自分と向き合い,絵にあらわしてみよう。

●自分の内面を描くことにした岩切さん



何枚も下描き
して,アイデア
を練る。「絵を
描くのが好き
だから,手は
入れたいな。」



「手は大切なモチーフ。丁寧に
色を塗ろう。」



自画像
紙,鉛筆,アクリル
53.6×37.7cm
生徒作品
自分にはいろいろな面
があります。そんな自分
の複雑な内面を,画面
を分けることであらわし
ました。手で何かをつか
み取るような感じが出せ
てよかったです。

編集方針②
授業で十分に
活用できる教科書

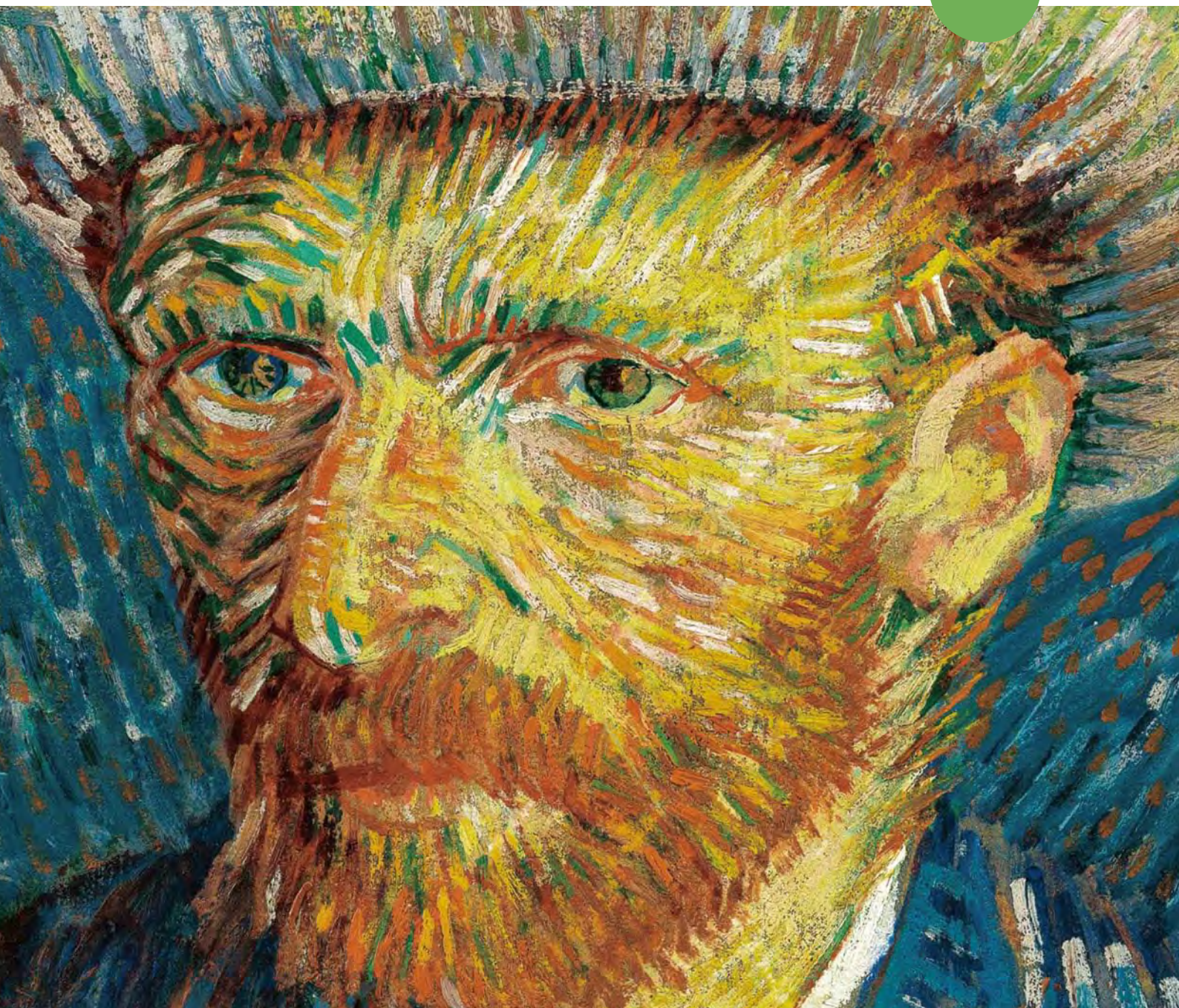
心を揺さぶる, 迫力の鑑賞図版

生徒たちの学習意欲を高められるよう、
大胆な紙面構成で生徒たちの
興味・関心を刺激する工夫をしています。



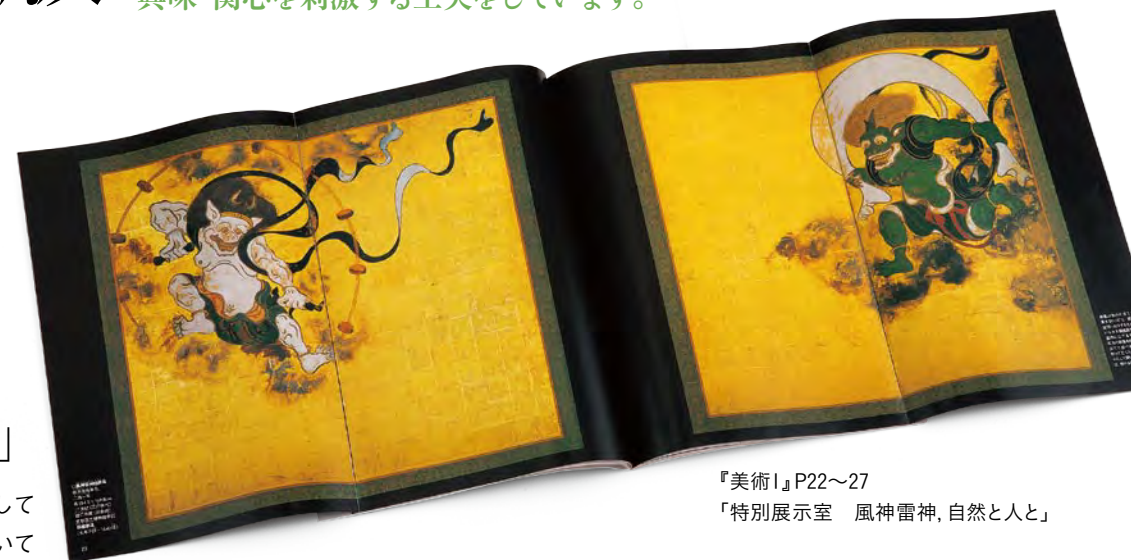
「原寸大で鑑賞しよう」
『美術2・3』P24～25
「原寸大で鑑賞しよう 灰色のフェルト帽の自画像」
1 ページ以上の紙面を使って、作品の部分を原寸大に掲載した鑑賞中心の題材です。作品の細部まで見ること、鑑賞がより深まるだけでなく、自らの表現活動にも生かすことができます。同様の題材は、他にも『美術1』『美術2・3』合わせて3本掲載しています。

原寸大



平成24年度版より 継続!「特別展示室」

平成24年度版より鑑賞題材として
設け、たいへんご好評をいただいていた「特別展示室」。新しい教科書ではさらに工夫しています。



『美術1』P22～27
「特別展示室 風神雷神, 自然と人と」



『美術2・3』P40～45
「特別展示室 ゲルニカ, 明日への願い」

新たな工夫

「ゲルニカ」では鑑賞している生徒のシルエットを添えて、作品の大きさを実感できるようにしました。

本物の色の追求 ～「金色」を使った印刷への道～

平成24年度版より「特別展示室」で取り上げている俵屋宗達の「風神雷神図屏風」。全国各地の学校で、鑑賞の題材として多くの実践が行われています。
平成28年度版教科書では、この作品の「金色」を追求し、本物の色を再現しようと試みました。平成26年に東京国立博物館で開催された特別展「栄西と建仁寺」へ編集者と製版技術者が出向いて本物を見ることから始まり、約半年間、試行錯誤を重ねました。そして、通常のインキに加え、「金色」のインキを使って印刷することで、これを再現しました。



「栄西と建仁寺」展へ出向いた製版の技術者。本物を見る前、緊張した面持ちだ。



上／印刷で実際に使用したインキ。金色の微粒子を混ぜ合わせている。
下／印刷に向けての最終打ち合わせ。製版、インキ、印刷の研究など、試行錯誤を繰り返した。

美術に囲まれる毎日の実感

生徒たちが日常生活やそれぞれの将来において
美術科で身に付けた力を生かせるよう、美術が私たちの暮らしや社会を
美しく豊かにしていることを実感できるよう構成しました。

平成28年度版を編集して
上野行一 中学校『美術』教科書著作者

光 村の新しい教科書は、生徒が
主体的に取り組み、豊かに発
想し、創造的に表現・鑑賞する学習
を支えます。

教科書を開いてみると、目にも鮮
やかな大きなサイズの作品が目飛び込
んできます。一目で生徒の心は揺さぶられ、意欲的に鑑賞を始める
ことでしょう。豊富に紹介されている生徒作品や表現の過程、工夫の
数々は、発想・構想を促し、主題の
生成を支援します。さらに、形や材
料、色彩など共通事項に関する内容
や、発想・構想の方法、表現技法の
基本など、『美術1』だけでも20
ページにわたる資料ページが、生徒
の自立的な学習を支えます。

教科書は先生にとっても使いやす
くあらねばなりません。私たちは全
国の美術科の先生方の声を基に、授
業で十分に活用できる教科書を目指
しました。効果的な授業の導入、鑑
賞作品の充実、豊富な資料など、題
材ごとの学習を念頭において構成し
ています。

また、暮らしや社会とのつながり
も重視しました。私たちの暮らしや
社会は美術に囲まれて成り立っており、美術を学ぶことが暮らしや社会
を考えることに結びついていること
を生徒に実感してもらうことが大切
だと考えたからです。それは伝統文
化の理解にもつながります。日本の
伝統文化に関する内容についても、
新しい教科書ではさらに充実を図り
ました。

今の中学生が社会で活躍する頃には、社会構造や職業の形態が大きく
変化していることでしょう。その変
化を乗り越えていくために、伝統や
文化に立脚した自立・協同し創造的
に生きていく資質・能力の育成を念
頭に置き、光村の新しい教科書はさ
らに進化しました。

うえの・こういち
元帝京大学教授。
近著に、『風神雷神はなぜ
笑っているのか』
(2014年、光村図書)。

一日の流れで、 美術を感じる

中学生の1日の生活を追う形で、美術に
囲まれた毎日の様子をわかりやす
く示しました。



『美術2・3』P70～71
「暮らしやすい町づくり」

(新版教科書
紹介)

『美術2・3』P72～73
「夢を形にするデザイン」



社会に生きる、 美術の力

美術の力によって社会の課題を解決
しようとしていたり、暮らしをより
豊かにしていたりする例を、題材で
取り上げました。

『美術2・3』P5～7
「朝起きてから夜眠るまでの美術」



作家の肖像

第 7 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1922- 柚木沙弥郎

ゆのき・さみろう
1922年東京都生まれ。染色家。
42年に東京帝国大学文学部美学美術史学科入学。終戦後、46年に大原美術館に就職。その後、染色工芸家の芹沢銈介に師事、染色家を志す。以来、多くの作品を発表し、数多くの個展を開催。絵本、版画、ポスターデザイン、彫刻など、染色以外の活動も精力的に行っている。近著に『柚木沙弥郎 92年分の色と かたち』（グラフィック社）がある。

ひょうひょう 飄々とした人

2013年夏、当館で、染色家・柚木沙弥郎さんの展覧会「いのちの旗じるし」を開催しました。そのとき、柚木さんはすでに卒寿を迎えられていましたが、声には張りがあり、お話しされることも実に明快。飾ったところがなくて飄々とした人——そんな印象を受けました。

柚木さんは、この展覧会に向けて新作に取り組んでくださったのですが、それが新版教科書『美術1』の32ページに掲載されている「まゆ玉のうた」（右写真）です。簡潔なデザインの中にモダンな空気が漂う、どこことなくご自身のお人柄を感じさせる作品です。

かた そ 型染めとの出会い

柚木さんの制作の基本は、「型染め」です。型染めとは、耐水加工した和紙で型紙をつくり、布にあてた上から防染のための糊を置き、その他の部分を染める技法。この方法でタペストリーや服地、屏風仕立ての作品などを制作されています。

彼が型染めに出会ったのは、24歳のとき。大原美術館（岡山県倉敷市）に勤務していた頃でした。ここで、型染めの第一人者である芹沢銈介（※）が制作したカレンダーを見て、柚木さんは強く心を動かされます。

そして美術館を辞め、民藝運動を提唱した柳宗悦から芹沢を紹介してもらい、本格的に型染めの道に進んでいくことになります。

芹沢は「始めから作家になろうとするのではなく、まず職人から学ぶべきだ」という考えの人でした。柚木さんは、師の勧めで静岡県の染物

屋に住み込んで修行をし、布の扱い方や染めの基本を一から学びます。それが、今の彼の原点になっていることは間違いありません。

詩情を感じさせる作品

師である芹沢の型染めは、非の打ちどころがなく完璧です。もし芹沢の作品が部屋に掛けてあったら、その前に立ってじっと見入ってしまうでしょう。いっぽう、柚木さんの型染めは、いい意味で隙がある。もし部屋に掛けてあったら、作品はもとより空間全体が心地よく感じられる、そんなよさがあります。「詩情」があると言ったらよいでしょうか。

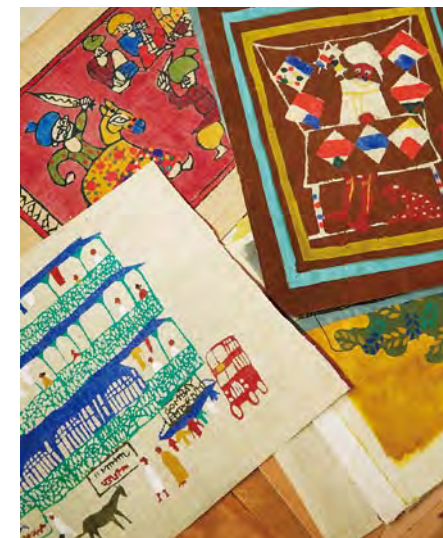
2014年秋、パリにあるフランス国立ギメ東洋美術館で、「La Danse des formes 柚木沙弥郎のテキスタイル作品展」が開かれました。こちらの展示も、とてもすばらしかった。私はそのレセプションに参加したのですが、柚木さんはマイク片手に非常にハキハキとお話をされて、見事に聴衆を惹き込んでいました。

今、現代美術の現場で、こんなに生き生きと制作に励む90歳のアーティストを、柚木さん以外に私は知りません。これからも変わらず作品を生み出して行ってほしい——パリの美術館で少し興奮しながら話す柚木さんの横顔を見つめながら、改めて思いました。（談）

※芹沢銈介（1895-1984）
染色工芸家。柳宗悦らの民藝運動に参加。
重要無形文化財保持者（人間国宝）。

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



上／「まゆ玉のうた」（1～8）
綿 型染め 各258×87cm 2013年 作家蔵
世田谷美術館で開催された「いのちの旗じるし展」で、
作品の前に立つ柚木氏。展覧会にあわせて、新作を発表した。

左／「指人形」シリーズ
紙粘土 布 2007年 作家蔵
型染めだけでなく、立体造形も制作。写真は紙粘土でつくられた指人形。
人形が着ている服は自身の染め布や古着を使う。

右／型染め絵
綿・紙など 型染め 1980年代頃 作家蔵
旅先で出会ったモチーフを作品することも多い。
写真は木綿の生地に型染めをし、和紙で裏打ちしたもの。（撮影：木寺紀雄）

美術部へようこそ! 宮城県名取市立第一中学校

共同制作に力を入れている名取市立第一中学校。
近年では、段ボールを使った立体作品を多く制作し、話題を呼んでいます。その活動をご紹介します。

迫力ある立体の制作

高さ3メートルを超える、段ボールでつくられた人気アニメキャラクター「ガンダム」。その堂々たるたたずまいに、思わず息をのむ。この作品は、名取市立第一中学校の美術部が毎年制作しているもの。

もともと、ガンダムの制作は、宮城県立多賀城高等学校の小川進先生が2001年に始めたものだ。「文化祭の目玉となる大きな立体をつくりたいと思っていたときに、生徒からガンダムはどうかと提案がありました。それで生徒たちといっしょにパソコンのソフトを使って型紙を一から起こし、制作したんです。学校内外から大きな反響がありましたね。今は『段ボールアート』として、ガンダムだけでなく、さまざまな立体制作に挑戦しています。平面だったものを組み立てて立体にしていって、完成したときの感動が大きいんですよ」と小川先生。

この「段ボールアート」の取り組みは話題を呼び、県内だけでなく、県外の中学校・高等学校にも広がりつつある。名取市立第一中学校・美術部顧問の佐々木裕美子先生も、「段ボールアート」に魅せられた一人。小川先生の指導を受け、美術部員と段ボールを使って立体作品を制作している。特に、ガンダムは親世代からの人気が高く、学校を訪れる保護

者からの評判もよいという。

つくる喜びを共有したい

ガンダムの制作の手順は、まず型紙をあてて段ボールを50以上のパーツに切り出す。そして、そのパーツをボンドで固定していく。頭、腕、胸など部分を組み立て、最終的にすべてを合わせて完成させる。特に、最後の組み立ての場面では、上級生が脚立にまたがり、下級生にテキパキと指示を出していて頼もしい。完成すると自然と拍手が起き、全員が笑顔に。

以前、同校の美術部員は20名ほどだったが、「段ボールアート」に取り組むようになってから「自分もあいう立体作品をつくってみたい」と、男子部員が急増し、今や男子25名、女子26名の大所帯だ。

佐々木先生は、普段から共同制作の場面を多く設定するように心がけている。2014年には、地元のサッカーチーム「ベガルダ仙台」の創設20周年を記念し、マスコットキャラクター「ベガッ太」を段ボールでつくった。スタジアムにも飾られ、地元新聞で取り上げられるなど評判に。生徒たちは、「大きな立体作品が完成すると、すごく達成感があるんです」とうれしそうに話す。

「つくる喜びをみんなで共有したい」と語る佐々木先生。その思いは、生徒へ確実に届いているようだ。



左／型紙をあて、ていねいにダンボールを切り出していく。上級生が下級生に教える場面も多くみられる。
右／ホットボンド(※)でパーツを接着させる。ボンドの乾きが早いので、手早く作業を行う。

※熱で溶けるボンド。工具を使って接着する。



教室を飛びだして

NPO法人 BEPPU PROJECT

NPO法人 BEPPU PROJECT (大分県別府市)が取り組む、アーティストと小・中学生による創作のワークショップについてご紹介します。



分県別府市を拠点に活動続ける NPO 法人「BEPPU PROJECT」。

アートのもつ、自由なものの見方や創造性を社会に広めるべく、アートイベントの企画・運営をはじめ、教育普及活動なども行っている。県内の小・中・特別支援学校にアーティストを派遣するプログラムも、その一つだ。アーティストによるワークショップを通して、子どもの自由な発想力や創造力を引き出すこのプログラムでは、学校と連携し、授業づくりの支援まで行う。

アーティストの専門分野は、音楽、ダンス、現代アート、写真などさまざま。昨年、大分市立佐賀関中学校を訪れたのは、風景・文化・社会という切り口から「食」を捉えた作品制作を行う「風景と食設計室 hoo」。「風景を食べる」というテーマのもと、生徒

とともに、風景を写真で切り取った「料理」づくりに取り組んだ。「『食べるなら』と思って見た瞬間に、日常の風景が料理に見えてきます。アーティストとの関わりが、世界を眺める見方を変えるきっかけになれば」と語るのは、本プログラム担当者の古原彩乃さん。

同団体では、他にも、アーティストと遊びをつくるなど、小・中学生を対象としたプロジェクトを展開している。「町とアートのつなぎ手」としての活動から、子どもたちの表現・創造する喜びが広がっていく。



器が描かれた紙を当て、道端の花を料理に見立てて撮影する生徒。

NPO法人 BEPPU PROJECT
www.beppuproject.com

放課後

第 7 回

A R T



写真：飛鳥園

第 7 回

「あしゅらぞう
阿修羅像 上半身(部分)」

乾漆・彩色 高さ153cm 734年
興福寺蔵(奈良県)

※新版教科書『美術2・3』の巻頭ページに掲載

阿修羅の魅力

09年、東京国立博物館で開催された「国宝・阿修羅展」で巻き起こった空前の仏像ブーム！と思いきやその後の仏像展の動員はさほど振るわず、やはり奈良・興福寺の阿修羅像の人气がハンパじゃなかったことがようやく世間的にも分かってきた。

それまで仏像といえば大概、修学旅行で見た奈良の大仏。「大っきいなァ」という感想しか持てなかった輩はその後、パンチパーマの大きな像であれば何だって仏像だと思いついでいる。しかし、阿修羅像は三面六臂の異形のお姿。髪は結い上げ、その一つ一つの顔は美少年であり、下唇を少し噛んだ表現や眉間に少しシワを寄せ思いにふける表情はイメージの仏像とは大きく違う。

ルーツは古代インド語の“アスラ”。仏教が流布する以前の戦闘神だったアスラは、後に仏教に帰依し、“八部衆”(天・龍・薬叉・乾闥婆・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽・阿修羅)に取り込まれたのである。だから、厳密に言えば阿修羅像は仏像ではない。そもそも仏の定義とは悟りを開いた覚者のことであり、それをフィ

ギュア化したのが仏像。悟った姿の如来と、悟ることを約束されているお姿、菩薩像まで。しかし、日本に伝来した時の仏教は既に大乘仏教であり、日本独自の神仏習合といった大らかな考え方も相まって全てを“仏”、または仏像と呼ぶようになったに違いない。

下っ腹が出てぽっちゃりとした体型の如来像と比べ奈良・興福寺の八部衆はどれもがスリムである。たとえば毒蛇を食らう神・迦楼羅(顔は鳥天狗)であっても、体は少年のようで表情はとても優しい。それは、一重にプロデュース(勅願)が女性(光明皇后)であることが大きいだろう。阿修羅に至っては“修羅場”なんて言葉があるようにかなり荒ぶった神であることは確か。その修羅場の虚しさを悟ったかのような繊細な表情には、今でいうジャニーズのセンスが入っているような気がする。いつの時代も女性が美少年に魅せられるのは同じ。そこが大きく他の仏像と違っていた点である。展覧会以降、“阿修羅超え”なる言葉まで生まれ、どの仏像が次にブームを起こすのか？ 仏のみぞ知る。

みうらじゅん

1958年京都府生まれ。
作家、漫画家、イラストレーター、ミュージシャン。
1980年武蔵野美術大学在学中に『月刊漫画ガロ』で漫画家デビュー。
著書に『アイデン&ティティ』、『色即ぜねれいしょん』など多数。友人のいとうせいこうと全国の仏像を鑑賞しまとめた紀行文『見仏記』シリーズが好評。
興福寺公認の「阿修羅ファンクラブ」の会長を務める。